# 館 － The fantastic girls photoed in the summer －

夜桜　野鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想写真館 －Ｔｈｅｆａｎｔａｓｔｉｃｇｉｒｌｓｐｈｏｔｏｅｄｉｎｔｈｅｓｕｍｍｅｒ－

【Ｎコード】
Ｎ２３３２Ｙ

【作者名】
夜桜　野鈴

【あらすじ】
新人ルポカメラマン芥川春樹。彼は大学時代最後の夏、ひょんな意思で失われた里、『幻想郷』に神隠しされてしまう。
そんな中、彼は様々な幻想郷の暮らしを知り、写真に納め、いつしか彼の過ごした夏は人生でかけがえのない思い出となっていく。
平和な幻想郷を漫遊した男のルポルタージュ。

あの夏は暑かった――。

# 1ー（1）

今年の夏は暑かった気がする。
自己紹介から始めようか。
僕の名前は芥川春樹。ルポカメラマンとして今年の春に大手出版社に就職した大学上がりの２２才だ。
自分のデスクの引き出しを開け、封筒に入った数十枚の写真の束を取り出す。
その写真に写っていたのは色とりどりの光の中を舞う少女たちだった。

そう、これを撮った去年の夏も暑かった――。

平成２２年６月下旬。
梅雨が明けてすぐに蝉はけたたましく鳴き始め、陽射しは真夏の色を帯びた。
大学最後の年となった僕は、某県の山に風景写真を撮りに登っていた。
舗装された山道は、既に完成していて美としての追求性を僕は感じることができない。あえて獣道を進み、その先にある何かを撮ることを僕はよく行っていた。
この日もそうだった。しかし、いつもと違い、自分の意思と言うよりは、『誰かに呼ばれた』ような気がして、ふらふらっと獣道のほうへ入っていったのだ。
ほぼ無意識だったと思う。気がついたら、屋根も落ち、瓦は割れ、雑草は茫々と繁り、蜘蛛の巣は太く張り巡らされた廃社に辿り着いた。

「美しい……」
僕はそこに底知れぬ美を感じた。
共感されることはないだろう。しかし、自分の感性に大きな衝撃を与えたのだ。
僕は夢中でシャッターを切った。
「もしこれが過去の栄華を取り戻したら、どれだけ素晴らしいだろうか……」
言って、ふと違和感を感じた。風が変わったのだ。
この世からは絶滅してしまった風。
僕は思わず振り向く。
光景にシャッターを切ることも忘れていた。
割れて歩き難いであろう石階段は、キレイに整頓され、朽ち折れていた元の色も分からぬ鳥居は、朱に塗られ荘厳に聳えていた。
違和感よりも、己がふと口にした言葉が真になったことに僕は戦慄した。
もう一度振り返り、社のほうを見れば、草は毟られ、瓦は整列し、蜘蛛の巣一つ無くなっていた。
空の色も澄み、喧騒さえない。微かに聞こえる遠くの声は、騒がしいのではなく活気の音だ。
「あら……また外の人？
にしてはまだパニックになってないのね。冷静なのかしら。
それとも鈍いだけ？」
後ろから少女らしき声が聞こえる。
どうやら階段を上ってきたらしい。
「僕はどちらかと言えば鈍い人間ですよ」
本日三度目の振り返りの前に居たのは、ノースリーブの巫女服という、なんとも前衛的なファッションの少女だった。見た目的には16、7だろうか。
夏ということもあり、露出の多い仕様になっているのだと思うが、健康的な汗を浮かべる肌には目のやり場に困る。

「なるほどね。じゃあ端的に言うわ。ここは、この世であって、この世でない。
あなたは神隠しに遇いました」
「……予想はしてたから驚かない、かな」
己の言葉が現実になった時点で粗方の整理は頭の中で着いていた。
「なら話は早いわね。
夏で良かったわ。紫も冬眠してないからすぐに帰れると思う」
「簡単に帰れるんだ……」
拍子抜け。
小説などの展開では『〜が終わるまで帰れません』なんて設定があるけど、流石は現実。やれそうなことが出来なくて、出来なさそうなことがやれる。
「その人、帰るつもりはないと思うわ」
どこからか声が聞こえる。
「こちらよ。芥川さん」
足下が裂け派手な服装をした少女――と言えば少女だが、雰囲気がおば……妙齢の女性と言うのが当て嵌まる少女が、ぬっと現れた。
「どういうこと、紫？」
この人が帰るためのキーパーソンの紫さんか……。
「そんなことより僕の名前何で知ってるんですか？」
日傘を虚空から取り出して開く。もう神隠しに遇った時点で大抵の驚かないが、不思議には思う。
「二人の問いには両方一言で答えることが出来るわ。
何故なら、私が呼んだからよ」
僕は内心、「ああ、なるほど」と思っていた。廃社まで行ったときの招かれるような感覚は気のせいでは無かったのか。
「芥川さん……だっけ？　あんた何一人で納得してんのよ。
面倒だからもっと端的に説明して頂戴」
「私は彼の意思を尊重したの。好奇心ではなくて、清潔さをもった写真への想いを汲み取っただけよ」

つまり僕は、
写真への想いで紫さんの気を引く→紫さんの何らかの手助けで神隠し
という状況だということか。
「帰すのは良いけど、彼の意思は力強くて……。彼の意思に反する時、私の境界は効果を為さないみたい。
数百人に1人の確率で存在するから、珍しいことではないのだけれど」
「ああもう！　紫の言ってることまどろっこしいわ。
要は、彼が心から帰りたいと思えば帰れるのね？」
そういうこと、と紫さんが返す。
「正直、僕は帰る気ないですよ。ここの美しさを撮るまでは」
その発言をした瞬間、場が凍った。真夏なのに。
「うふふ、貴方やっぱり面白いわ」
「ここまで来ると鈍感は罰せられるべきだと思うの」
なにか失敗したことは伝わった。何を失敗したのかは理解できないけど。
「という訳で霊夢。芥川さんが危険な場所で撮影するときは護衛してあげなさい」
「嫌よ。死にたきゃ勝手に死ねば良いわ」
それでも巫女なのか……。
「駄目。私は芥川さんが気に入ったの。他の妖怪たちに食べられたりしたら悲しいわ」
「そこまで言うなら紫がすれば良いじゃない」
「それも駄目。私はやることがあるの」
「何よ？」
「お昼寝♪」
霊夢が払い棒で一閃――するがそれよりも早く地面に境界を作り逃げ込んだ。
「冗談よ。芥川さんの荷物を取りに行くのよ」

あ、そういえば替えのフィルムも少ししか持ってない。
「というか、僕の自宅分かるんですか！？」
「あ、初めて感嘆符付きで驚いた」と、霊夢。
「そこは驚くのね。
分からないわ。だから住所教えてくれるかしら？」
「外の世界の住所なんて分からないんじゃ……」
「大丈夫よ、Ｇｏｏｇｌｅがあるんだから」
紫さんは現代にも居るようだ。もし帰ったらネットカフェでも覗こう。紫さんが居るかも。
紫さんに住所を教えると境界を閉じて地面は何事も無かったかのように固まった。
「霊夢さん、で良いんですよね？」
「霊夢で良いわよ」
「じゃあ霊夢。ここは何て名前の里なんですか？」
「ここは『幻想郷』。人と人でない者の共存する失われた里よ」
「失われた……」
「そう、空想の生き物は居ないけど、幻想の生き物、つまりは妖怪なんかの失われた生き物は外の世界にいないけど此方側にいる」
「じゃあ紫さんも？」
「紫はもっと特別。幻想郷が隔離される時から居て、幻想郷の隔離計画に一役かってる古参中の古参だから」
「幻想郷っていつ頃隔離されたんですか？」
「明治時代って言われてるわ」
「明治――と考えると歳は……」
「あまり考えないほうが良いわ。噂では創世記時代から生きてるとか。
冗談だと思うけど」
妖怪というより神の領域なんじゃ……。
「ところで、住むとこ無いわよね？」
「あ……はい」

「しょうがないわね」
「神社に住まわせてくれるんですか？」
「あんた変態？　男と女が一つや屋根の下なんてそんなふしだらな真似を神職の私がするとでも！？
男女七歳にして席を同じうせず！」
ものすっごく顔を赤らめて否定された。
「知り合いに男がいるからそこに泊めてもらいなさい。どうせ暇だろうし」

## 1－（2）

木漏れ日の射す森の中。
紅白の袖に引かれ、僕はとある場所を目指す。
『妖精の悪戯に惑わされないように』との名目らしいのだけど、蝉のけたたましさが、一層男としての威厳の無さを笑っているようで惨めだ。
「ねぇ、霊夢さん」
「しつこいわ。畏まらなくても霊夢で良いわよ」
「う……」
やっぱり癖で『さん』を付けてしまう。でも、しょうがないか。
「霊夢。幻想郷の蝉は毎年こうなのかな？」
「こう――？　ああ、煩いってこと？　そう言われれば今年は盛んね」
今気づいたのか……。
ここまでで思ったのだけど、霊夢は怠惰なようで筋がある。面倒と言っても頼まれればやる。
そんなつかみどころが無く飄々としていて、尚且つ鈍感（のふり？）な性格であると思う。
紫さんといい霊夢といい、幻想郷の住人には、こちら側に無い一種の余裕のようなものを感じる。
就職活動に忙殺されていた僕には羨ましく思う。
ふと、森が開ける。
太い木のが僕達の脇に聳えている。桜の木のようだ。
「春だったら綺麗なのにね――」
霊夢が独白する。
確かに、この大きさで満開なら、その姿はさぞ壮観なことだろう。
「あの店が私の知り合いの店」
いつの間にか僕の手を離し、先に歩いていく。

離された手が少し心残りで、ワンテンポ遅れて着いていく。
年季の入った看板には『香霖堂』と、下手でも達筆でもない文字で書かれている。
「霖之助さん、居るかしら？」
「ああ……外の蝉が騒がしいと思ったら霊夢が居たのか」
「私はミンミンなんて鳴かないわよ」
皮肉に満ちた、奥から若くとも老成した声が聞こえ、霊夢がむっとした声で返す。
と、奥の店主が起き上がる。
白髪で色白だが不健康なイメージはない。が、おおよそ接客には向かなさそうな不機嫌な表情。
「おや？　見ない顔、というか外の人かな？」
眼鏡の位置を直し、僕の姿を認めると立ち上がる。
「残念だけど、向こう側に戻れるような道具は、僕の店でも売ってないよ」
「違うわよ。暫くの間、春樹さんを泊めてあげて欲しいのよ」
「……は？」
店主の眼鏡がずり落ちる。
「期間は？」
「飽きるまで」
「何で僕なんだ！？」
「男女七歳にきて席を同じうせず、よ」
「今回ばかりは正論だね……」
はぁぁ、と大きくため息を吐き椅子に座る。
「で、何で君はこんなことになったんだい？」
店主は僕に向き直す。
「それが、僕は少し特殊なようで、僕が心から帰りたいと思わないと、紫さんの境界すら通れないそうなんです」
「ははっ……、神隠しに遭いやすい体質ね……」
哀れむような呆れるような声で苦笑いする。

「しかし、こっちに留まりたいなんて珍しいね」
「まぁ、戻れない訳じゃないなら、焦ることはないかと思ってまして」
「まったく、愚かなのか強いのか……」
言葉とは裏腹にどこか愉快そうだ。
「さて、分かった、引き受けよう。
外の人間の話を聞けるのは僕にとっては有益だからね。
だけど、これも商売だ。有償なのは分かってるよね？」
「私に対価を求めるのはお門違いよ」
霊夢は肩を竦める。
「分かってるさ。今回は春樹くんに払ってもらうよ」
「お金もそんなに持ってないんですけど……」
「そちら側の貨幣なんて、幻想郷じゃ紙切れと鉄屑さ。体で払ってもらうよ」
僕は肩を抱いて身を守る。
「僕はノンケだよ！？
勘違いしないでくれ。掃除とか買い出しとかのことだよ」
「あ、ああ……そうですよね」
一瞬、アルバイト先の店長（男色家３５歳／♂）を思い出してしまった。
「まぁ、手始めに――」

ドカンッ！！

壁が豪快に吹っ飛び黒づくめの何者かが入ってくる。
「よう霖之助、八卦炉の調子が悪いんだ。あと、霊夢が居て邪魔だったから壁から入ったぜ」
青筋を浮かべたま店主は笑顔で僕にこう言った。
「春樹くん、悪いけど木材買ってきてくれないかな」

## 2―（1）

店主は僕に『香霖堂』と言えば木材を別けて貰えるという人里の大工屋に向かうことになった。
山登りで足腰は鍛えているけど、何と言うか、精神的に疲れた。
いくら僕が鈍感でもストレスを感じない訳が無く――

「あ、人里の方向、聞いてないや」

今思い出した。
振り返るが、既に帰り道が分からない。と、言うか、帰り道が捻れて見える。
これが妖精の悪戯かぁ……。
カメラに写るのかと、パシャっとフラッシュを焚く。
すると捻れが無くなり道が平らに見えるようになる。
「ああ、なるほど。カメラのフラッシュに驚いたのか……」
霊夢から聞いた話によると、妖精は少し驚かせば、よほど強い妖精でない限り逃げ出すのだそうだ。
特に今は夏なので、強い妖精はテリトリーが狭いとも言っていた。
氷ででも出来ているのだろうか？
と、何かがお尻にぶつかる。人の頭――かな？
振り返ると、黄の髪に赤いリボン、全体的に黒い服に身を包んだ少女が僕を見上げていた。
「あれ、迷子かな？」
いやいやいや、迷子は僕だ。
こんな所に子供一人来る訳がない。つまり――

「あなたは食べてもいいにんげん？」

妖怪だ――！？
距離を取ろうと足を半歩引いたとき、妖怪の首がカクリと折れる。
「うわぁ！？」
あまりの不気味さに情けの無い声が出るが、本当に不気味なのだ。
そのまま妖怪はパタリと倒れた。
「すー、すー」
……あれ、寝てる？
「もしもーし……妖怪さん？」
律儀に声を掛けるあたり、僕って危機感が無いなって思う。
だけど、何もしなければ幼い女の子に見える子を、森の中で放っておくことは何となく気が引ける。
妖怪少女の目が半目に開く。
「おにくー」
寝ぼけ眼で僕にかきつく。
そのまま口を開け、僕の喉元に食らいついた。
「やばっ……！？」
が、まだ眠いのか、食らうと言うよりは甘く噛まれる。
「ちょっと……擽ったいから」

「……何やってるの？」

ジト目で霊夢がこちらを見ていた。蔑むような視線で。
「あの……勘違いしてません？　どこから見てました？」
「ルーミアを襲って食べようと（性的な意味で）してたあたりから」
「襲って食べられそう（ｅａｔ的な意味で）なんですよ！？」
「え……？」
いや、何その初めて知りました顔は。
「冗談よ。ルーミアの食人嗜好は知ってるから。
でも、昼間で良かったわね。夜なら丸呑みね」
ふふんと笑うが、僕は苦笑いで返す。

「まぁ、間に合って良かったわ。霖之助さん適度に抜けてるから慌てて追いかけたんだからね」
勝手に死ね、とか初対面で言っていた割りには、やはり律儀だと思う。
「ありがとう、霊夢」
「お礼ならお賽銭で払ってね。心じゃお腹は満たされないわ」
供物は多そうな気がするんだけどね……。
まぁお賽銭と供物は別勘定かな。
霊夢は再び眠ったルーミアを抱き抱え木の根本に寝かせた。
「何はともあれ、人間の里に行くまでの護衛はするわ」
僕たちは人里に向かって歩を進めた――
「って、僕の進んでた方向って逆方向!?」
「あのままじゃ、いずれ吸血鬼の館に行くわよ」

人間の里には活気が溢れていた。
神社まで聞こえていた活気の正体はこれだろう。
「やっぱり人里は良いわねぇ」
霊夢は大きく伸びをする。
ああ、そんなに腕を挙げるとノースリーブの間から――サラシですか。
「ねぇ、春樹さん」
「はい、残念です」
「え？　まだ何も言ってないんだけど……」
しまった。
僕は慌てて取り繕う。
「いえいえ、護衛して貰ったのに一文無しで何もお返しが出来ないってことですよ」
「あら、別に良いわよ。対価なんて元々求めてないから」
我ながら良い緊急回避だったと思う。

「人里じゃなかったらスペルカード使ってるけどね」
ボソッと不穏なこと言ってませんか霊夢さん！？
うん、もう幻想郷で疚しいことは止める。命が惜しい。
「さて、私はここで終わりね。神社に戻って寝るわ」
「はい、ありがとうございます」
「だから、霖之助さんのところで稼いだら私のところに投げなさい」
「かしこまりました」
冗談めかして言う霊夢に、こちらも芝居がかった恭しい態度で返す。
「素直なのは良いことね」
そう言うと霊夢は神社の方向へ飛び立った。翼もないのに奇妙な能力だと思う。
何だか結局、飄々として礼すらまともに受け取らなかった。
でも、呼び方が名前になったのは一歩前進かな？　『芥川』のほうの語呂が長くて嫌になっただけかもしれないけど。
その後は里の人に尋ねて大工の場所を目指した。
大工とも無事約束を取り付けることは出来たのだが、『またか』と豪快に笑われた。
一つ助かったことと言えば、やはり、里の人の服装は明治の装いで、現代で言うラフな服装をしている僕はかなり好奇の目で見られた。
だけど、『香霖堂』の名前を出した途端に、皆、好奇の視線を取り下げ、態度も軟化したことだ。
要は、物珍しい＝香霖堂なのだろう。
だけど、困ったことが一つだけできた。
帰りの護衛である。
霊夢も神社に帰った今、香霖堂まで帰る道は危険だ。
日ももうすぐ暮れるという時間で、特に、昼間ルーミアと出会し

たばかりである。
「さて、どうしようか……？」
と、視界の端に巫女装束がチラリと見えた。
霊夢が戻って来てくれたのかと思い、丁度、巫女装束が曲がった角を追う。
「霊夢！」
僕は曲がってすぐに呼び掛けた。

## 2―（2）

振り返った少女は霊夢ではなかった。
「すみません。私は霊夢ではありません」
霊夢と同じノースリーブの巫女装束には変わりない。だが、濃く緑に映える髪や服の装飾等、さらに白蛇の髪飾りで房を結っているなど、見れば霊夢とは違うことは一目瞭然だ。
「あ、ごめんなさい。知り合いと勘違いしたんです」
すると、少女はくすりと笑んだだけで特に咎めることなく、
「よくあることですから。気にしていません」
と、なんだか少し哀の隠る様子で返してきた。
「先ほどのお知り合いとは、もしかすると博麗巫女――と言っても服装が外のお方のようですし分かりませんか。博麗霊夢さんのことですか？」
頷こうとしたとき、頭に残った違和感に首が止まった。
里の人は誰も僕を外の人間だとは言わず単なる変人程度にしか見てなかった。
それなのにこの少女はすぐに僕を外の人間だと気づいたのだ。
「失礼なこと聞くんだけど、君は何者？」
その言葉に少し瞬巡して口を開く。
「あまり多くのことは外の人に話せませんので、名前だけでも構いませんか？」
僕は頷く。
「東風谷早苗と申します。とある神社で巫女をしています」
『東風谷』とはかなり現代風の名字の響きだが、そういうこともあるのだろう。
「ありがとう、僕は芥川春木。
大が……あー、こっち側で言う寺子屋の延長みたいなものに通ってる。

写真機で風景を撮影するのが趣味なんだ」
「芥川さんは大学生だったんですか。そのポーチにはやはりカメラが――」
と言ったところで早苗さんは口をつぐむ。
僕もおかしいとは思った。スラスラと淀みなく『大学』や『カメラ』といった横文字まで言えるのは不思議だ。
「早苗さんは、もしかして――」
「ごごご、ごめんなさい！　お夕飯の支度があるので急いで帰らないといけないんです！　神様と御神体に怒られるんです！」
神様と御神体！？　詳しく訊きたいけど、言うが早いか、早苗さんは全力で僕のもとから去っていく。
後には人の減った街道にポツンと残される僕。
今まで会った妖怪や人間とは違って不思議な人だったように感じる。
早苗さんと話している間にも、もう日は半分を越えて山に沈んでいる。
これは本格的に早く帰らないとまずいことになる。
早足気味に人里を出た僕は、昼間の記憶を頼りに山道を駆ける。
しかし、一度沈み始めた太陽はあっという間に見えなくなり、辺りは闇に包まれる。
提灯も何も無い中、あるのはケータイのキーライトくらいの心許ない灯り。
これは困った……。
立ち尽くす僕の視界の端に赤いものが映る。
昼間会ったルーミアのリボンを思い出し身構えるが、かなり遠くのようで、どうやら光っている。赤提灯のようだ。
誰かが屋台でも開いてるのだろう。
僕はその提灯を目印に歩を進めた。
だが僕は、ここが幻想郷であることを忘れてしまっていた――。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2332y/

幻想写真館 － The fantastic girls photoed in the summer －

2012年1月14日03時45分発行